

## 7 国際交流

### 進捗状況報告

理工学部と同様に、本学の国際交流に関する基本方針に則り、国際化への対応や国際交流の推進に努めている。国際レベルでの教育研究交流を緊密化させるための措置は理工学研究科として組織的な取り組みはないが、各教員レベルで外国人客員教員・博士研究員・留学生の受け入れ、理工学研究科の教員による国際シンポジウム・国際会議の開催、理工学研究科の教員・学生のシンポジウムへの参加などに多大な努力が払われているのが現状である。以下、2005年度、2006年度における実績から進捗状況を説明する。

理工学研究科への外国人（教員・研究員）の受入れ状況として、2005年度は、客員教員 1名、客員研究員 1名、博士研究員 10名、であり、2006年度は、客員教員 1名、客員研究員 2名、受託研究員 2名、博士研究員 11名、外国人特別研究員 2名（受託研究員と重して受入）である。また、協定校からの交換教員や交換学生の制度があり、中国の吉林大学やインドネシアのサティヤ・ワチャナ・キリスト教大学から交換教員・交換学生として、2005年度は交換教員 2名、交換学生 1名があり、2006年度は交換学生 3名があった。これらの方々による理工学部講演会もしばしば開催されており、2005年度には6回、2006年度には11回行われている。

一方、理工学研究科の教員による教育研究成果の外部への発信については、多数の英文による論文発表の他、国際シンポジウム・国際会議の開催などがある。さらに国際学会への参加・国際共同研究・招待講演等の海外出張も年毎に増加の傾向にある（2004年度は22名、延べ40回、2005年度は34名、延べ75回、2006年度は34名、延べ67回）。

また、2006年度にはインドネシアのサティヤ・ワチャナ・キリスト教大学とツイニング・プログラムの協定を締結した。これは、サティヤ・ワチャナ・キリスト教大学で1年間のコースワークによる修士学位（M. S i）を取得した学生を、理工学研究科博士課程前期課程に大学院特別学生（外国人）として受け入れ、2年次に編入学させるプログラムである。2005年度の自己点検評価報告書の改善の具体的方策として、理工学研究科あるいは理工学部の中に国際交流委員会のようなものの設置の検討があげられていたが、この点については検討自体まだなされていない。

### 学内第三者評価

本学の国際交流に関する基本方針に則り、国際化への対応や国際交流の推進に努めており、認証評価でも「国際会議・シンポジウムの開催および教員・学生の参加が十分見られ、外国人客員教員、博士研究員、留学生の受け入れ、海外の協定校との交流にも努力がなされている」と評価されている。理工学研究科あるいは理工学部の中に国際交流委員会のようなものの設置については検討段階にある。

なお、特別委員からは以下の意見があった。

- 海外学会への参加などにおいて個人的努力により改善が図られてきているが、その規模（専任教員59人）からみて一層の交流が望まれる。
- 国際交流委員会設置の構想の検討を進める必要がある。